

歩きながら

歩いているのだが

足の上げ下ろしの抵抗感はその質を変え

左右上下の動きは音楽のように実体を失い

まるで足が自動的に延びたり擦り減ったり

筋肉の輪郭がぼやけて

体ごと船に変身したかのようにだ

逆に意識だけは透明で

遮るものなど何もない

あの世とこの世の隙間を

壁にぶつかる事も無く歩いて行く透明人間

自分の姿が消えたり見えたりしているのが

自分にもはつきりと見えているのだ

幸せだったな 迷惑かけたな

人のために何も出来なかったな

想像力だけが生き延びて

創造行為は溶けて行つたな

弱かったな 逃げてばかりいたな

登りたかったが登れなかったな

面白いこと楽しい事の一步手前で見ていたな

飛び込むのは怖かったな

妙に時間の流れが良く見える

筋を引いて流れて行くのが

所々でスパークしながら

脈が描くグラフになって八十年が画面を流れる

正しかったな 間違っていたなというパズルは

霧のように飛び散って もう手には戻らない

ただ歩いている感覚が自分を映している

このままだんだん地面にめり込んで行つて

それでも暗い地中を歩き続ける予感だけは

不滅であると錯覚している

そう 歩いているのだなと

(2012.2.28)